2007 年度春学期（月曜日 2 時限）創造技法科目 - ナレッジスキル　　科目ソート：14030

An Introduction to Fieldwork Method

フィールドワーク法

担当：加藤文俊（かとうふみとし）
メール：**fk@sfc.keio.ac.jp**
授業に関する質問・その他は：**fw07@fklab.net**
授業ウェブ：**http://web.sfc.keio.ac.jp/~fk/fw_07S/**
研究室：i407（内線 53247）
オフィスアワー：月曜日 14:00～16:00（他の曜日・時間については調整します）

【履修にあたって】

近年、“フィールドワーク”ということばが一般的に使われるようになりましたが、“フィールドワーク”においては、地道に観察・記録をおこなうこと、時間をかけてデータの整理や解釈を試みることが重要です。つまり、知識を生成するための“技法”としてのトレーニングには（それなりの）時間とエネルギーが必要なのです。また、メディア（たとえばカメラ付きケータイ）を活用したあたらしい調査方法について考える、“実験するマインド”も要求されます。2007 年度春学期の「フィールドワーク法」は、下記をすべて満たすことが履修条件です。

- カメラ付きケータイをつかっているひと
- 出席するひと
- 授業時間外のフィールドワークに時間・エネルギーを使うことができる（つもりがある）ひと

実習等の便宜上、履修者数を 70 名程度に制限します。希望者が多数いた場合は、選考をおこないます。第 1 回目の講義（4/9）で配布した用紙に必要事項を記入したひとを対象に選考しますので、履修希望者はかならず出席してください。また、入門的な内容であるため、１・２年生の履修を優先することがあります。

【講義案内】

「フィールドワーク法」は、社会や文化を知るためのひとつの手段です。したがって、「技法」としての実践的な意味が重要であることはいうまでもありませんが、じぶん自身で「問題」を定義するという「ものの見方」や、調査・分析の結果を解釈し表現するという「コミュニケーション」の問題とも密接に関わっています。この授業では、“フィールドワーク”や“インタビュー”に代表される質的（定性的）な調査方法について学びます。

今学期の「フィールドワーク法」では、相互に関連する 3 つのテーマについて取り組むことになります。

【1　フィールドワークをおこなう】

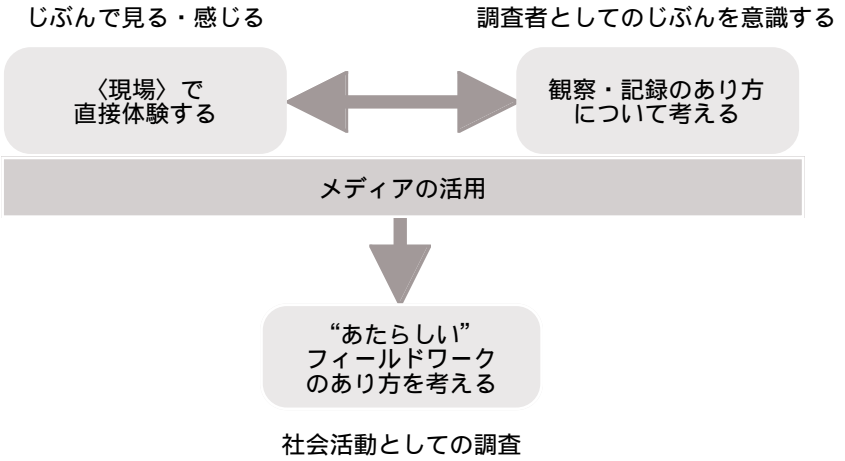
入門的な性格や時間的な制約を考慮し、あらかじめ“フィールド（現場）”を指定します。各自（またはグループ）でテーマを設定し、学期をつうじて“フィールドワーク”や“インタビュー”などをすすめ、調査レポートをまとめます。キャンパスの外に出て、まちを歩いたり、写真やビデオを撮ったり、人に話を聞いたり、まずはじぶんの目で見ること・じぶんのカラダで感じることが重要です。

【2　観察・記録のあり方について考える】

また、さまざまなメディア機器の活用と観察・記録・分析方法との関連について考えます。それは、じぶんで見たこと・感じたことをどのように「調査報告」として整理し表現するかという問題です。「フィールドワーク法」とよばれる一連の方法が、デジタルメディアを前提としたとき、どのように変わりうるのかについて考えることも重要なテーマとなります。

とくに、「フィールドノート」のための“装備（gear）”として、調査者であるじぶんを意識するための方法として、カメラ付きのケータイをつかった実習課題を出す予定です（カメラ付きケータイを使っ

ているひとの履修を受け入れます)。あたらしい「フィールドワーク法」のあり方について実験を試みる、やわらかい発想や創造力・想像力のある学生を歓迎します。



【3　社会活動としての社会調査をデザインする】

ただ調査をおこなうばかりでなく、何らかのかたちでメッセージを発信できるような、ひとつの「社会活動」としての調査のあり方についても考えます。「社会活動」として調査（フィールドワーク）を理解するとき、どのような課題（可能性や限界）があるのか…。具体的なことは未定ですが、可能であれば時間割の時間外に全員でおなじ〈現場〉に出かけて、こうした問題について実践的に考えてみるつもりです。その場合には、授業時間の１回分（もしくは２回分）を振り替えることにします。

【教材】

下記は参考文献です。必要に応じて、クラスで資料や文献リストを配布します。

- 海野弘（2004）『足が未来をつくる：〈視覚の帝国〉から〈足の文化〉へ』（洋泉社）
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』（せりか書房）
- 佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる』（新曜社）
- 佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク』（新曜社）
- 谷岡一郎（2000）『「社会調査」のウソ：リサーチ・リテラシーのすすめ』（文春新書）
- ホワイト, W.（2000）『ストリート・コーナーソサエティ』奥田道大・有里典三（訳）（有斐閣）
- ジョン・ヴァン=マーネン（1988）森川渉（訳，1999）『フィールドワークの物語：エスノグラフィーの文章作法』（現代書館）
- 好井裕明（2006）『「あたりまえ」を疑う社会学：質的調査のセンス』（光文社新書）

【提出課題・試験・成績評価の方法など】

出席・ミニ課題（７回+）・調査レポート・フィールドノート・授業中のグループワーク・授業態度などで総合的に評価します。“フィールドワーク”や“インタビュー”のために部屋の外に出かけることになるので、“現場”を大切にしながら、頭もカラダも動かすことが求められます。グループで課題に取り組む場合もあるので、コラボレーションの意味・意義については各自で考えながらすすめてください。

学期をつうじて、(個人またはグループで)“フィールドワーク”に取り組むことになります。レポートは、企画書～中間レポート～最終レポートという流れで、徐々に仕上げていきます。最終的な「成果」はもちろん重要ですが、段階的に調査レポートを作成していく「プロセス」も評価します。詳細については授業時間に説明します。

（1）企画書：どのようにフィールドワークをすすめるか、できるだけ具体的な計画を立てて企画書としてまとめます。
（2）中間レポート：企画書を提出後、何度か“フィールド（現場)”へ出かけて観察・記録をおこな

い、経過報告をまとめて発表します。
（3）最終レポート：引き続きフィールドワークをすすめ、中間レポートに加筆・修正をおこない、最終レポートを完成させます。
（4）発表会：履修者数やスケジュール調整等で可能であれば、最終回（あるいは 12・13 週の 2 回分）は、フィールドワークの成果の発表会にあてたいと考えています。
（5）ふりかえり：フィールドワークをふりかえり、じぶん自身の活動を評価します。

＊ また、フィールドワークに必要な考え方やものの見方を理解するための、簡単な課題に取り組むことになります（【授業計画】の備考欄を参照）。

【授業計画】＊ 授業の構成や内容はクラスの進行状況に応じて調整します。

	月曜日	内容	課題・備考
1	4/9	・オリエンテーション ・授業概要の説明/すすめ方について	日程調整など
2	4/16	・質的（定性的）調査の考え方 ・課題の説明 ・ケータイによるデータ収集（テスト）	▲課題の説明 【ぷち課題 1】じぶんで近づく：5/5 正午まで
休	4/23	（開校記念日）	
休	4/30	（振替休日）	
3	5/7	・ フィールドワークについて（1）：リサーチ・リテラシーをめぐる問題について 【ぷち演習 1】記録と想像力 【ぷち課題 1】講評	【ぷち課題 2】くり返す：5/12 正午まで ▲企画書提出
4	5/14	・フィールドワークについて（2）：メディアと社会調査 【ぷち演習 2】フィールドについて語ることばをさがす 【ぷち課題 2】講評	【ぷち課題 3】集める：5/19 正午まで
5	5/21	・写真を撮る/写真を読む ・記号論的に“フィールド”を読む ・問題意識をまとめるにあたって 【ぷち課題 3】講評	【ぷち課題 4】まわりを見る：5/26 正午まで
6	5/28	・視点・視座・視野について ・データの整理/データの分類と配列 【ぷち演習 3】写真を分類する	
7	6/4	・分類と配列について ・ 中間報告（1） 【ぷち課題 4】講評	【ぷち課題 5】規則性をさがす：6/9 正午まで
8	6/11	・中間報告（2） 【ぷち課題 5】講評	【ぷち課題 6】時間を読みとる：6/16 正午まで
9	6/18	・フィールドワークついて（3）：社会活動としての社会調査 【ぷち課題 6】講評	【ぷち課題 7】同時に撮る：6/18～6/22（詳細はクラスで説明します）
10	6/25	・「社会調査」の限界と可能性 ・フィールドからの離脱 【ぷち課題 7】講評	【ぷち課題 8】影を知る：6/30 正午まで
11	7/2	・成果報告の準備	※コンサルテーション（個人/グループ）
12	7/9	・成果の公開 ・これまでのまとめ 【ぷち課題 8】講評	
13	7/11	・成果報告会（展示会）	※月曜代替日
		・ふりかえりレポート	▲7/30 ごろ提出

【カメラ付きケータイでフィールドワーク】

定性的な「社会調査」をするにあたっては、調査の対象となる〈モノ・コト〉への感受性ばかりでなく、調査をしているじぶん自身への感受性も重要です。つまり、じぶんが、いったいどのような〈立場〉で〈モノ・コト〉を見ているのか…をどれだけ意識できるかということです。また、その〈立場〉をどのように明示的に表現（＝つまりは調査結果の報告）できるか、が大切です。
フィールドワークをおこなう際には、現場で見たこと・発見したことを書き留めるために、「フィールドノート」を書くのが一般的です。テープレコーダーやビデオカメラが普及した結果、さまざまなスタイルの「フィールドノート」が生まれました。つまり、記録・再生のための技術が変わることによって、ぼくたちの調査のスタイルも変化しうるのです。いまでは、ケータイで写真を撮って、ウェブ上で公開することができます。サイズや画質にはまだ問題がありますが、じぶんの調査の軌跡を記録するのに役立ちそうです。
たとえば出先でケータイのボタンを押して写真を撮る…。ちいさな１枚の写真には、いったい何が「写っている」のでしょうか。矩形に切り取られ、「写される」のは、ある年代のある土地の風景だけではないのです。

ふだんはさほど意識しないのですが、写真には、〈その時・その場〉で想起された過去や未来の風景も「写されて」いるのです。出先で眺めた風景が、過去や未来のさまざまな「イメージ」によって規定されていると考えると、１枚の写真は、現在の自分と過去（あるいは未来）の風景とを結ぶはたらきをしていることに気づくでしょう。これは時間的な隔たりにかぎられたことではありません。１枚の写真をつうじて、ぼくたちは、空間的な連なりや、人と人との関係のなかで現在のじぶんを位置づけることができるのです。過去、現在、未来という区別そのものが流動的で曖昧であり、「写された」写真は、移りゆく風景を、あるいは変わっていくじぶんを暫定的に「記録」したものにすぎないからです。

この３枚の写真は、いろいろな時・場所で「写された」ものですが、それは同時に〈その時・その場所〉でのじぶんも「写している」…と考えることができます。年末の慌ただしい中、東名高速のサービスエリアで見た富士山。ＳＦＣの建物から偶然見えた富士山。新幹線の中から見えた富士山。それぞれが、“富士山を見ていた”じぶん自身の記録なのです。

ぼくたちの日常生活にはさまざまな「個人的記録」があります。写真、手紙、日記、切符、伝票、成績表など、すべて広い意味で「生活記録（ライフ・ドキュメント）」とよぶべきものです。そして、さまざまな「生活記録」をつうじて、じぶんの生活が埋め込まれた社会的・文化的な文脈や、じぶんの内面について洞察をくわえることができます。そのための方法や想像力を身につけることが「フィールドワーク法」の目指すべき方向性です。